

お 名 前	性 別	満年齢	終戦時の年齢	現 住 所
う け い ひ さ よ 請井 久代	女 性	7 5 歳	9 歳	七郷一色

(富岡東部 実家の祖母)

鳳来寺村門谷小学校4年生

① 8月15日は、どこでどんなことをしていましたか。

夏休みなので、家で遊んでいましたが、学校に集まるように言われて出校しました。大切な話があると聞かされました。

② 終戦のことを、どこで、どのように聞かれましたか。

校庭に大人も子どもも大勢集まっていました。当時小学校は、戦地で怪怪けがをされた軍人さんたちの病棟びやうとうになっていたのので、白衣を着た軍人さんたちと玉音放送を聞きました。

③ 敗戦を知らされた時の気持ちやその時の様子

放送の内容が理解できませんでしたが、近くにいたおじさんが「戦争は終わったんだよ」と教えてくれました。軍人さんたちは、みんな泣いていました。私は、空襲くうしゅうもないし、夜も電気を付けて明るくなると、うれしく思いました。フィリピンで戦死した父も（死んだのはウソだと思っていた）きっと帰ってくると思いました。

④ 体験の中で、子どもたちに語り伝えておきたいこと

「帰らなかった父 疎開のつらさ」

昭和19年5月、父に赤紙が来て、29日に千葉に入隊しました。「お国のために戦ってきます。」と軍服を着た父は、大きな声で集まった町内の人たちにあいさつをしました。豊橋の羽根井はねい小学校まで軍歌を歌って、日の丸の小旗をふって大勢で行進しました。小学校には豊橋中の出征兵士しゅつせいが集まっていました。

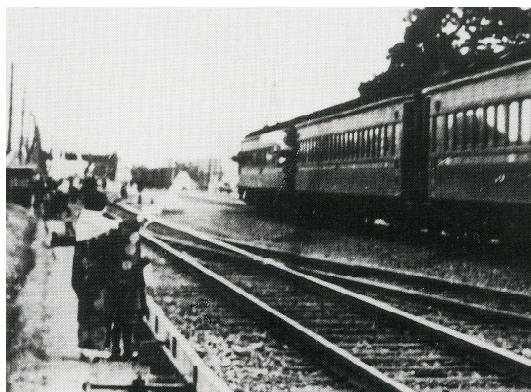
豊橋駅から父たちの乗った列車は、軍服姿ぐんぶくすがたで満員でした。みんな小旗を振り、声を限りにさげびました。

「とうちゃ〜ん！げんきでね〜！」

父から来る手紙には、必ず検閲済みと赤い大きなスタンプが押してありました。

7月2日、朝早く父からの電報が来て、「広島へ行く」と、豊橋駅の通過時間を知らせてきました。駅まで走り、その列車に乗り込みました。車内をくまなくさがしましたが、父は見つかりませんでした。蒲郡がまごおりで引き返しました。豊橋駅には、父と同じ海軍の水兵さんたちでいっぱいでしたが、やはり見つかりませんでした。

2、3日すぎて、知らない女の人から手紙が来ました。汽車の中で、となりの



(写真集 東三河の一〇〇年より)

▲ 出征兵士を見送る母子 御津町 昭和10年代

席にすわった父からたのまれたと、父の手紙が同封どうふうされていました。

「お前たちの元気な姿すがたを見て安心した。これから広島県の呉くれにある砲術ほうじゆつ学校に入
学する」とありました。それが、父の最後の手紙となりました。父は、私たちの
姿をどこで見たのでしょうか。父から声をかけることができなかったのでしょうか。

「お国のために戦って、死んで帰れ！」が、きまり文句だった時代です。戦死の
公報が入ったのは、冬の寒い日でした。白木の箱で帰ってきた父の箱の中は、土
のかたまりだけでした。

豊橋くうしゅうの空襲も多くなって、学校では集団疎開そかいの話が出ました。私の家では、母
の実家えんこへ縁故疎開に決めました。鳳来寺ほうらいじでは疎開の人たちが大勢いて、学童もク
ラスの3分の1くらいは疎開の子どもたちでした。「疎開者のくせに」とか「疎開
の子」と言われ、差別されました。授業中、問題が分かって手をあげると、「疎開
者のくせに手をあげるな。」と言われ、びっくりして手を引っ込めました。先生が
地元の子どもたちと差別することもありました。畑のものがなくなると、疎開者
のせいにされたこともありました。

戦争が終わって、ほとんどの人たちはそれぞれ帰っていましたが、そのまま
残った人もいます。父がいなくなった私たちも残りました。4年生で疎開してから、
6年生までの私の学校の成績は、全部同じで、一つも変わりませんでした。

戦後、父の遺品いひんが返ってきました。その中の小さな手帳にメモが残されていま
した。母には、「5人の子どもと強く生きていってくれ。」長女の私には、「お前は
お姉さんだから、母を助けて弟たちのめんどろをみてくれ。」弟には、「お前は長
男だから家族を守れ。」妹には、「オトウサンハ、テキヲヤツツケタラ カナラズ
カエル。ソレマデ チイサイオウトウタチト ナカヨクアソンデ マッテテクレ。」
とありました。遺書いしよのつもりだったのでしょうか。

兵士たちの帰国が始まって、夜になって聞こえる足音を、みんなで息をひそめ
て聞きました。「父かもしれない」と、かすかな望みをいだきながら……。

やがて、母は食糧しよくりよう不足と過労たおで倒れ、働けなくなって、5人の子どもはそれぞ
れ親せきに引き取られ、ばらばらに育てられることになりました。

母が82歳さいで亡くなった時、初めて戦争が終わったと思いました。父の死を信
じず、認めず、65年が過ぎました。

8月15日が来るたびに、当時の様子がアニメで放送されます。大きな軍艦ぐんかんが写
った時、孫たちに「あなたたちのひいじいちゃん、海軍の水兵さんで、爆撃ばくげきされ
て大きな船といっしょに海に沈しずんでしまったんだよ。レイテ島のタクロバンという
所で、今でも海の底にいるかもしれないよ。」と話しました。

ばらばらで育った妹や弟も、今は幸せに暮らしています。戦争は悲しみばかり
で、よいことは何もありません。少し前に、日本で恐ろしく、悲しい戦争があっ
たこと、みんな悲しみを乗り越えて生きてきたことを知ってほしいと思います。